

会 議 議 事 録 (抄)

会 議 名	2023 年度専門学校東京テクニカルカレッジ 第二回 環境・バイオ系教育課程編成委員会
開 催 日 時	2023 年 12 月 1 日(金)15 時 43 分～17 時 10 分
会 場	専門学校東京テクニカルカレッジ 11 階 1101
参 加 者	<p><外部委員:6 名> (順不同・敬称略、役職は委員名簿参照)</p> <p>市川 和登 (元 大手エネルギー会社)</p> <p>水谷 圭亮 (水 ingAM 株式会社)</p> <p>池上 正人 (元 特定非営利活動法人 日本バイオ技術教育学会 理事長)</p> <p>佐々 義子 (特定非営利活動法人 くらしとバイオプラザ21 常務理事)</p> <p>大藤 道衛 (日本バイオベンチャー推進協会 理事 兼 学校法人小山学園 専門学校東京テクニカルカレッジ バイオテクノロジー科 非常勤講師)</p> <p>小林 健人 (特定非営利活動法人 NPO・フュージョン長池 理事 兼 長池公園 副園長)</p> <p><内部委員:5 名></p> <p>松井 奈美子 (学校法人小山学園 専門学校東京テクニカルカレッジ バイオテクノロジー科 科長)</p> <p>大江 宏明 (学校法人小山学園 専門学校東京テクニカルカレッジ バイオテクノロジー科)</p> <p>宮ノ下 いずる(学校法人小山学園 専門学校東京テクニカルカレッジ バイオテクノロジー科)</p> <p>今野 祐二 (学校法人小山学園 専門学校東京テクニカルカレッジ 環境テクノロジー科科长 議長)</p> <p>井上 綾子 (学校法人小山学園 専門学校東京テクニカルカレッジ 環境テクノロジー科主任 書記)</p>
	<p><バイオ・環境系分科会>(第二部)</p> <p>1. 議長挨拶(今野)</p> <p>2. 2023 年度第 1 回バイオ・環境分科会の議事録確認</p> <p>3. バイオ環境系教育活動の状況報告 ※詳細は次頁以降参照のこと。</p> <p>3.1 専門人材育成訓練生の状況</p> <p>3.2 2023 年度の就職内定状況</p> <p>3.3 リアルジョブプロジェクト(RJP)の取組み</p> <p>3.4 外部へのアナウンス(市民講座、TTC バイオカフェ、Eco-Café)</p> <p>3.5 国内研修</p> <p>4. 高専連携授業</p> <p>4.1 練馬工科高等学校</p> <p>4.2 その他の高等学校</p> <p>4.3 高校の先生向けセミナー・体験実習</p> <p>1)中野工科高等学校 体験実習</p> <p>2)高校の先生向けセミナー</p> <p>5.その他</p>
討 議 内 容	<p>3.1 専門人材育成訓練生の状況</p> <p>バイオテクノロジー科:現在 12 名が訓練中(2022 年度 5 名入学、2023 年度8名入学のうち 1 名退学)</p> <p>環境テクノロジー科 : 現在4名が訓練中(2022 年度2名入学、2023 年度2名入学)</p> <p>今年 11 月末、東京都に来年度の申請を行い、バイオテクノロジー科/環境テクノロジー科/Web 動画クリエイター科の 2024 年度募集定員は各 10 名に決定した。(インテリア科も申請したが不採用となった)</p> <p>3.2 2023 年度の就職内定状況(11/24 現在)</p> <p><昨年度の内定率></p> <p>バイオテクノロジー科 :内定率94% (17 名内定、進学 1 名、1 名現状維持)</p> <p>環境テクノロジー科 :内定率 100%(9 名中 9 名内定)</p> <p><11/24 現在の 2023 年度内定率></p> <p>バイオテクノロジー科:内定率67%(就職希望者 12 名中 8 名内定、4 名活動中、1 名は就職希望せず)</p> <p>※注1:キャリア採用枠に応募する専門人材育成訓練生は、11 月末頃から就職活動を本格的に開始。</p> <p>環境テクノロジー科 :内定率 100% (就職希望者 11 名中11名内定、1名は就職希望せず)</p> <p>※注2:専門人材育成訓練生も早い時期から就職活動を実施し、既に内定を獲得している。</p>

3.3 2023年度リアルジョブプロジェクト(RJP)の取組み

環境テクノロジー科

【今野】

毎年、4期5期に実施。今年は6テーマに分かれて、1年2年合同でやりたい事を選択してもらっている。卒業研究はしていないので、成果発表会はRJPの内容を発表する。

バイオテクノロジー科

【宮ノ下】

1,2年合同の6班編成で実施。2期～4期の金曜の午後に活動している。

第1回分科会で、実験を検証するなど取り入れているのであれば、もう少しそのプロセスを発信した方が良くと指摘があった。学生には自分の作品や学生同士のやり取りなど取り組みの楽しい要素をSNSで発信してもらい、私が月末にそれぞれの班はこんな風に検証しながら実施しているという内容をブログにアップしている。既に4回ほどまとめた。

3.4 外部へのアナウンス、連携活動(市民講座等の開催)

【松井】

バイオテクノロジー科では「TTC バイオカフェ」と「遺伝子検査活用セミナー」の活動をしている。TTC バイオカフェは5月12日、11月30日に実施した。あとは2月に環境とバイオのコラボレーションで実施したいと考えている。遺伝子検査活用セミナーは12月21日にハイブリッドで行う。

【大藤委員】

今回はハイブリッドで行う。遠方の方はWEB、東京の方はこちらでという事になる。

【今野】

環境の市民講座は、前は対面で実施していたが今はZOOMを使ってリモートで実施している。今年は10月20日に「森林管理をめぐる課題と政策について」をテーマに林野庁の方に来ていただいて講演をして頂いた。次回は12月8日に「自然と一体感を感じる、シェアリングネイチャーとネイチャーゲーム」という内容で開催が決まっている。こちらリモートになる。先ほど松井科長からもあったが第3回は2月にバイオとコラボ開催の予定で進めている。

【池上委員】

例えばこれらの資金はTTCから出ているのか。主導権はTTCが持っているのか。

【松井】

主催は回によって変わる。

【佐々委員】

くらしとバイオプラザ21が2、バイオテクノロジー科が1で資金はやっていて、くらしとバイオプラザ21が企画している。

【今野】

Eco-Caféの場合は題目を探してくれる(企画)のは環境教育振興協会、講師料等は学校から支払っている。

【今野】

毎年夏に専門学校コンソーシアムTokyoが行っているTokyoしごと倶楽部というイベントがある。調理、旅行、動物などいろんな専門学校10校が集まって夏に実施しているイベントで、昨年はバイオがここ(東京テクニカルカレッジ)で開催されたイベントに参加した。今年は環境テクノロジー科が中央動物専門学校で開催されたイベントに参加してきた。

【松井】

大体300人くらい来てくださる。いろんな学校のブースを設けているので、なるべく興味のあるところを回してもらおう。

【今野】

今年(の参加者)は300人程はいなかったと思うが、同じような形で開催している。来年はバイオが参加する。

3.5 国内研修について

【今野】

国内研修は長野研修または長野実習と呼ばれているもので、新型コロナウイルスの影響で長野での研修がしばらくできなくなっており、その代替としてバイオは1年生が新宿御苑での植物観察、2年生が中野区史跡オリエンテーリングを実施した。環境は長野で実施していた内容を八王子市長池公園で実施している。長野研修センターは9月で閉めて、返却準備に入っている。学内では自動車大学校とテクニカルカレッジで提案を検討中である。国内の環境研修もやはり新型コロナウイルスの影響で中止してきたが、今年度も少し時期的に無理かなという判断で中止が決まっている。来年度はどうか、特に環境の場合は学生も外での調査に興味があるので、国内環境研修も含めて、野外実習が出来るように考えていきたい。

【大藤委員】

その国内環境研修は、小笠原の次の候補として屋久島を挙げていたと思うが。

【今野】

屋久島で募集して(参加)人数も集まったが、ちょうどその時期に新型コロナウイルスが流行し始め、その時に中止になった。

【大藤委員】

再開した場合には屋久島にするのか。

【今野】

それは大いにある。

4. 高専連携授業

4.1 練馬工科高等学校

バイオテクノロジー科環境テクノロジー科以外の学科による活動報告はここでは割愛するが、1年生を対象に前半後半に分けて年に24回実施している。

- ◎前半:環境テクノロジー科 2023年9月15日(金)簡易水質測定 ※実施済み
バイオテクノロジー科 2023年9月22日(金)糖度と塩度を調べよう ※実施済み
- ◎後半:環境テクノロジー科 2024年1月19日(金)水処理実験 ※予定
バイオテクノロジー科 2024年2月2日(金)色素を分けてみよう ※予定

4.2 その他の高等学校

1)クラーク記念国際高等学校 厚木キャンパス:プロジェクト型学習(PBL)の協力依頼

- バイオテクノロジー科 2023年10月5日(木) ※実施済み
- 環境テクノロジー科 2023年10月12日(木) ※実施済み

2)堀越高等学校

- 環境テクノロジー科 2023年1月26日(木) ※実施済み
- 環境テクノロジー科 2024年1月17日(水) ※予定

3)多摩工科高等学校

- 環境テクノロジー科 2023年2月13日(月) ※実施済み

4.3 高校の先生向けセミナー・体験実習

◎バイオテクノロジー科 ※実施済み

テーマ :再生医療の今

実施日時:2023年8月22日 13時~17時

◎環境テクノロジー科 ※実施済み

テーマ :水処理業界と若手水処理技術者(ウォーターエンジニア)の育成

【今野】

実はここで言う高専連携は2種類ある。文科省事業に基づいて連携しているものと、広報が高校と連携している(文科省とは異なる)ものがある。文科省の方は、正式には「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」といい、専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発・実証というものである。その中の「工業系分野における高専連携の5年一貫教育プログラム開発・実証」で、こちらは小山羊自動車大学校が採択されて取り組んでいる。令和3年度に採択されており5年計画なのでこれが5年続くと考えてもらえればと思う。

文科省の連携プログラムと一緒にやっている高校は、堀越高校、多摩工科高校、六郷工科高校、蔵前工科高校、練馬工科高校の5校である。分野は自動車、環境、情報処理、データサイエンス、建築、インテリアの6分野で取り組んでいる。バイオテクノロジー科もかなり実施しているがそれは文科省事業とは別で、広報が高校の先生と相談して連携している授業である。環境も文科省とは別のプログラムもやっている。

【大藤委員】

文科省事業は助成金ですよ。助成金に応募して採択されて年間いくらかと出ると。実際にはいくらかで。

【今野】

そこまで我々のところまでは情報はもらっていない。

【大藤委員】

少なくとも1年間でも、向こうに行ったり生徒が来たりして授業をやる。そういう時の材料費実験費そういう諸々は文科省の助成でまかなっていると。TTCの広報でやっているのは、広報予算の中で作っていると。それがたまたま同じ学校になっていることがある、とそういうこと。

【今野】

そういうことである。

【大藤委員】

練馬工科の先生からするとあるものは文科省の事業である、あるものはTTC。というのは、向こうから見た場合には文科省の事業、これは公益になる。ところがTTCの事業は広報というか宣伝を受けている形になってしまいますよね。高校側から見ると。

特に公立高校の側から見ると、その文科省の助成金でやるという公益のものだと堂々と外に発信できるわけだが、特定の専門学校でも大学でもいいが、そこをやっていると学生募集の一環だと見なされて中々発信できないと高校の先生と話すときよくそういう話がある。

【佐々委員】
大藤先生の仰った、高校側とすると特定の企業とかそういうところからの何らかのベネフィットを受けると、学校が洗脳されているというわけではないが、そういう風に誤解されるかも知れないので高校としては言いにくい、という事か。

【大藤委員】
そうだ。高校の先生に何うと、全てではないのだろうが、特に公立高校の場合には、例えばかつて SPP プロジェクトというのがあった。そういう文科省のプロジェクトで、例えば専門学校とか大学とか高専とかやるというのは大いにいいわけである。うちは文科省の助成がとれたんだ、ということで広報ができる。ところが特定の大学でも何でもそうだが、そこからとなると、いかにも学生募集のためにやっているという風に思われてしまう。

【池上委員】
結局大学の出前授業ととられる。そのところを言うておられる。

【大藤委員】
まさにそうである。大学の出前授業と一緒にされてしまう可能性がある。でも、文科省のプロジェクトでやっているものというのは公益なので、それは全然見方が違うと思う。特に公立の先生はそうである。

【佐々委員】
ただ、生徒にとっては、それは文科省であろうが私立の学校であろうが。考え方で、その先生が説明しきれないのであれば、そうは言っても子供にとっては全部ベネフィットである、お金の出どころはどこであれ。例えば、ノーベル賞の先生が自分のポケットマネーでやっていたら、誰も断らないだろう。

【池上委員】
バイオで講義する時は塩濃度とか糖濃度だったか、それを中心に調べるのか。例えばその中に「TTC ではこういう事をやっているんです」というようなものは入ってこない、ということで良いか。(大学の)出前授業では学校の方が「この大学ではどういう研究をやっているのですか。そういう事が聞きたいです。」というような形で、先生はただ自分の研究の内容を話したりされるわけであるが、バイオ学科の場合は「塩濃度を調べよう」ならその時は本当にその実験というか講義だけをされるという事か。

【今野】
文科省の方のテーマを決める時は、一応委員会があって、工科高校とは言え職業意識は全くないので、小山羊園として連携した時に、特徴的なものが広くわかるような、わかりやすい本当に簡単な分野のところをやってくれという事である。その次の段階がまたあってまた次があるという感じで、本当に基本的な事である。それと時間数も 45 分×2 で 90 分しかない。だけど実習をやってくれという話なので結構厳しいと言えば厳しい。

【松井】
大体多分「バイオの分野って何？」と言う話を先にさせていただかないと高校生は全然わからなくて、大体最初に「バイオとか環境の分野はこういう分野ですよ、こんなお仕事がありますよ」と言う話をさせてもらってから実験のお話を少しさせていただいているので、そんな時に「こんな会社に行けます」と言う話になってしまうと本校の話になってしまうので、気持ちはいってしまっているというのは否めない。

【今野】
余談だが、前から実施してはいたが最近はかなり多い。「来月のいついつ空いていますか」と聞かれることが多い。多分、間に入っている進路関係の会社が高校周りをして(高校の先生から)「職業の勉強をさせてから就活をさせたいから」と頼まれると、そこが企画してこの学校にはこんなことをしてもらいましょうねとなったら、それがパーンと依頼が来る。その分野ごとで。

【佐々委員】
ある意味で、高校の先生がキャリア教育をやりきれないから、外注して人を探しても持ってくるという。

【今野】
そういう事だ。その時には話もあるのだが、できれば何か実習をさせてくれと言われる。それとこれは全く別で、高校の先生向けセミナー、バイオは 8/22、環境は水 ing さんにご協力いただいて水処理業界の若手技術者の教育という事で実習室を使って講演をして頂いた。

【宮ノ下】
その 8/22 のバイオテクノロジー科で行った高校の先生向けセミナーについて報告させていただく。前年度は大藤先生に講演をお願いして 6 名プラス内部の先生 1 名の 7 名で活気のある先生向けセミナーが出来たが、残念ながら今回は予約 4 名だったが当日 2 名だった。非常勤講師の吉本先生、慶応大学医学部の研究室の先生に「再生医療の今」というのを講演いただいて、実験は私が担当している HeLa 細胞という人のがん細胞があるが、その簡単な培養方法と細胞数の計測をカウンターで行った。なかなか集まらなかったのはテーマが再生医療だったからか。植物とかの方が実は興味があって、ここにお二人の感想が書いてあるが、他にどんな分野に興味あるか聞いたら、植物培養とかゲノム編集とかそういうのに興味がある、高校の生徒もそういうところに興味があるので先生も学びたいというような意見があった。

現在の高校生の進路について(大学と専門学校)

【池上委員】

大学と専門学校というのは住み分けていると思う。大学は例えば大学院を出たりして、いわゆる研究職とかそちらの方を志望しているのではないかと。専門学校となった時はむしろテクニシャンとかそちらの方ではないかと思う。大学の方に行った学生が(専門学校に)再入学するとなった時に、その辺が難しいのではないかと思う。

【宮ノ下】

ただ(大学に)入りやすいので本当にふわっと大学に入る人が増えている。農業高校とかで中々自力で大学には入れないが、今は推薦で四大に入れる。でも大学院に行けるかと言うと求められることも違ってくるので、そこまでではないという人が出てきている状態。

【池上委員】

だから結局専門学校というのはテクニシャンとか技術そういうところを養成していこうとしておられるのではないかと。

【井上】

多分高校の段階で進学しようと思ったときに、大学とか専門学校とか、高等教育出た後の就職先まではさすがに高校生もイメージできないので「とりあえず大学」と言う格好で行ってみたが、研究職を目指すところまでのところではできないとか、実験とかに憧れがあってそこは諦めきれないが研究職までは頑張れないという人たちは、将来そこを諦めてしまうのか、もしくはテクニシャンの方に切り替えて頑張るのかと言う話ではないか。

【池上委員】

わかる。だから例えば、大学農学部に行って、卒業した後彼らが100%バイオ関係に就職しているのかというところではない。皆いろんなところに就職している。他のところに就職したがどうしてもバイオ関係のところには就職したいという人に「東京テクニカルカレッジはバイオ関係のところへ就職できる」ということをアピールして、そういう思いのある方に来てもらうのが良い。

【宮ノ下】

まさにそうなのだが、どこに行けば良いのか。SNSをやってみたりチラシを置かせてもらったりしているが。

【池上委員】

大学のバイオ学科でも、実験も講義もかなりのことは教えている。でも、学部で卒業した時にバイオ関係に就職するかと言うところではないということ

【宮ノ下】

そうである。技術教育と研究教育は違う、そこをまず知ってもらいたい。高校の先生にも知ってもらうために(高校にも)行くが、なかなか話が届かない。高校の先生は専門学校よりは大学に入れたいというのが本音のようである。

【藤沼委員】

バイオの就職先は、例えばバイオベンチャーのようなところは、ほとんどはバイオテクノロジーやその分野を卒業した人が大体いっているが、例えばうちの会社のようにほぼネットワークのようなところにも、ちらほら元々はライフサイエンスをやっていた人はいる。何でと思うが「ライフサイエンスをやってきたが、これから食べていくためにはSEの方が良いと思った」という感じである。その逆もあるのではないかと思っているが、実際にバイオベンチャーの人たちを見るとライフサイエンスをかじっていない人がそこで上手くやれている話はあまり聞かない。そういう意味から言うと、バイオサイエンス系の業態が若干特殊なのかな、というのは業界にいて感じる。バイオの業界に入りたい、興味を持っている人たちのワンステップとして専門学校というのはある気がする。

【市川】

高校生から大学生くらいの人たちは、自分が将来こういうものになりたいと思っている人たちは多分10%もいない。高校も卒業するのだから次は大学に行っておけば就職先の選択肢が広がる、だからとりあえず大学に行って勉強だけして半分遊びながら卒業しようというのが多いと思う。そうすると後から失敗だったと思う人も出てくるし、ここまで来たが違う方向に行こう、と言う人も出てきてしまう。

【藤沼委員】

一般的な話で、短大や大学をドロップアウトする理由は、学業についていけないのか、それとも違うことがやりたいのか。

【宮ノ下】

私が見たところの表では、やる気がないが30%くらいだった。やっぱり「思ったのと違う」と言うのがあるのかも知れない。

5. その他

技能五輪国際大会日本代表選手選考会開催についての報告。

【今野】

水職種の技能五輪国際大会の、日本代表選手の選考会が(本校を会場として)開催された。準備期間も含めて一週間、大会自体は11/2~11/4と3日間。

若者の技術、物づくりの向上を目指すなどの目的で国際大会を開いている。1962年から日本は参加して

いる。ようやく3年前に水職種ができた。

【水谷委員】

ちょっと誤解のないように、この大会自体は水ingが主催しているわけではなく、水技術職種の分科会が主催している。そこの日本代表選手の選考会に我々の社員が出ている。実際は1社だけしかまだ出場していないが、ゆくゆくは業界のいろいろな競合他社さんを含めてみんなで技術を磨いて国際大会に打って出よう、というような内容である。まだ水技術部門は出来て日が浅いのでそういう状況である。翌年の1月に正式に技能五輪の委員会の方で日本代表として認められるか、という段取りで今はまだ候補と言う状況である。

【今野】

第47回(国際)大会は、来年のフランス リヨンである。競技期間は来年の9/11～9/14までである。その中の一つに水職種が入っている。

【井上】

水技術は生活で誰しも一番身近なところだと思うが、そういうのに関心がある若手の技術者育成にもっと関心を持ってもらいたいというのがある。

【藤沼委員】

どんなことをやっているのか。

【水谷委員】

いくつか競技項目がある。簡単に説明させてもらおうと、例えば、水が入ってきてDOコントロールしたり、流入量をコントロールしたりして、決められた水質・コストで水をきれいにしていくというシュミレーションの競技。2番目は、街を一つ想像してもらって、そこに人が住んでいる。何人住んでいてその排水が出てきた時にどういうプロセスで処理していくかというプロセスを作る競技。

3番目が実際に配管を組んで水を流して、その水を流すのにどういうセンサーが必要なのか、そのセンサーをコントロールするためにどういうシーケンスを作るのか、そういった競技。4番目はポンプに異常が仕込まれていてその異常を発見して修理する、そういう競技。5番目が水質分析。

【井上】

それを全部1人でやる。3日間ローテーションで全項目を一人で試験受ける。

【大江】

これは大変だ。

【水谷委員】

すごく広範な技術・知識が必要になる。

【佐々委員】

日本のレベルは高いのか。

【水谷委員】

去年の(国際)大会で銅メダルである。ポスターの一番左側、うちの会社の社員。

【大藤委員】

この方が銅メダルをとられた。

【井上】

年齢制限があるのでトレーニング期間が結構短い期間しかなく、その辺が難しい。

【水谷委員】

別の専門学校の話だが、技能五輪に学校として取り組んでいる学校もある。非常に良いのかなと思う。

【藤沼委員】

学生さんも出られる？

【今野】

出られる。年齢制限だけ。海外だといわゆる職業訓練校みたいなどころが出る。

【藤沼委員】

TTCの学生さんも行ける？

【今野】

行けるがこのユニットが半端じゃない。置くところもうちはなかなか。

【井上】

行けるが(競技内容が)広範過ぎてなかなか。

【水谷委員】

実はこの機械は日本では当社しか持っていない。

【今野】

それなりに(価格も)高い。

【水谷委員】

冒頭の方で高校の先生向けのセミナーで講演させてもらったときに使ったのがこの機械。

そこで下水処理場の簡単なフローをこの機械で再現して講演した。

【今野】

DX云々とかあるが、全部コンピューターでコントロールしてやる。

【井上】

気候変動の問題があつてゲリラ豪雨などが増えているので、下水の方もそうだが上水の方も水質が急激に変わったとしても毎回安定した水道水を供給しないといけない。だから気候変動に対応したことをやらないといけないという事だ。

【大藤委員】

今日お話しいただいた報告事項を見ると非常に外への発信等は非常によくわかるが、カリキュラム等は次年度も今と同じでいこうという発想で良いのか。

【今野】

そろそろ変えないといけないなど言うのはあるが、今お話しできる状態ではない。

【佐々委員】

今の大藤先生と同じで、人集めの話とかではなく、私たちとしては「え、中身大丈夫なの」というところがやっぱりある。

【井上】

私もこの会議は教育課程編成委員会なので、できるだけカリキュラムの話とか、次の世代に向けた教育内容の話にフォーカスしたいなと思っている。特に環境なんかは問題が大き過ぎて、結局は CO2 問題だが。カリキュラムを組むのは結構大変だがエネルギーの話とかをもう少し入れていきたいという考えがある。省エネの考え方とか。結局仕事をしていて電気を使っていないところは無いので、その辺はもうちょっとカリキュラムの中に組み込んでやっていきたい。それと、PFOS・PFOA の問題も調査すれば多分大きな問題になってくので、そういうところは学生にはアナウンスをいっぱいしているが、なかなか社会と結びついた意識のある学生が、今、本当にいない。ニュースになっていることをできるだけ授業の最初に「今、こういうのがニュースになっているけど見た？」という風に話しながらやっているが、やっぱりそこは今の社会問題を踏まえた上でカリキュラムを組む必要があるなと思う。

【藤沼委員】

企業でそういうことをやっているような部署が 2 年間ここで勉強して戻るとか、そういうのもカリキュラムによっては…

【今野】

今言ったニーズをやっていかなければならないのもよくわかるが、入ってきている人の対応も無視できない。そこが低いところはその何倍も力がある。両方やらなくてはならないカリキュラムを検討するっていうのは。結構新しいことやるとか難しいことやるとかは比較的出来ると思うが、現状の高校で何もしてこなかった人にそこをどう持っていくか。かなり難しい。

【井上】

多分、文科省が高専連携を進めるというのは、きっとそこに考えがあるのだと思う。自分たちの社会を作っていく、仕事を通して自分たちの社会を守っていくという事があると思うが、そういう事が考えられる人材育成というのを高校や専門学校が協力してやっていきなさい、ということかなと思っている。

【今野】

工科高校は仕分けをし始めた。昔は機械、電気、化学という学科があった。例えば杉並工科さんは機械電気とか理工科学とか全部学科を廃止にして IT 環境と言う名前にして、工科高校だが法政大学などと連携をとって大学に行くための工科高校にしている。

以上